



KYOTOWRITERS RESIDENCY

2025年10月18日(土)～11月17日(月)の期間、7名の招聘作家を迎え、第4回京都文学レジデンシー(KWR04)を開催しました。招聘作家のコメントや、イベントの開催報告をお届けします。

KWR04 招聘作家の声

滞在中は執筆が非常にはかどりました。そして、京都というすばらしい街に深い愛着を覚えています。他の参加作家と出会えたことも良い機会でした。

パトリック・フラナリー / Patrick Flanery
(オーストラリア / 京都文学レジデンシー フェロー)

一番楽しかったのは、クロージングイベントで、日本語に翻訳した新作小説を披露し、聴衆と分かち合った時です。他の参加者の母国語が分からなくても、彼らの話し方のリズムを楽しむという経験は、実験的で、芸術的な刺激になりました。

キム・ヘビン / Kim Hyebin
(韓国 / Arts Council Korea フェロー)

📷 KWR04 招聘作家
Photo by Ai Nakagawa

久しぶりに読書を思う存分していました。好きな作家を発掘できました。溜まっていた疲労から回復でき、フレッシュな気分で元気に活動を続けることに繋がったと思います。

ムティター・パーニッチ / Muthita Panich
(タイ / 国際交流基金ASEAN文芸フェロー)

他に代えがたい時間でした。私の中にいる作家という存在に存分に没頭できたこの体験を、これからもずっと大切にしていきます。そして皆さんの存在が私たちの励みになりました。私たち作家を熱い思いで迎え、私たちの作品にも興味を持ってくれました。滞在が終わったとき、さあ家に帰るぞ、とは思えなかったのは私だけではないと確信しています！

カリナ・ロブレス・バーリン / Karina Robles Bahrin
(マレーシア / 国際交流基金ASEAN文芸フェロー)

ハイライトは、本当に途切れることのない執筆の時間を持てたことです。山々と静かな空間に囲まれた生活は、作品と深く繋がることができました。比叡山を訪れたことは特に意義深い経験でした。あの時の雰囲気は忘れられず、私の執筆活動において重要な一部となりました。

そしてとりわけレジデンシー滞在中に芽生えた友情に恩を感じています。アイディアを共有したり、お互いの作品を読み聞かせ合ったり、一緒に時間を過ごせたことで、作家人生におけるコミュニティの大切さを再確認できました。

チラット・チャルムセーンヤーコーン / Jirat Chalermpanyakorn
(タイ / 国際交流基金ASEAN文芸フェロー)



魔法のようでした。すでに懐かしく思っています…時間はあまりに早く過ぎ去るのです。

フランチェスコ・オットネッロ / Francesco Ottonello
(イタリア / イタリア文化会館-大阪フェロー)

人生で二度あるとは思えない濃厚な経験。この瞬間にしか触れ合えない方々と過ごした京都の秋。今も頭でその音が鳴っています。関わって下さったレジデンシーの皆様へ深く感謝します。この活動が続きますように。

花氷 / Hanaka (日本 / 京都文学レジデンシー フェロー)

KWR実行委員と アシスタントによる イベントレポート

オープニング・フォーラム

「熊も抱きしめる」今年度のテーマはなかなか攻めた設定。分断と排外主義、人間の営為と環境の問題を「熊」に込めた。司会は昨年に続き、藤井光さん。対するは7名もの作家たち。その文学創造的源泉に数少ない質問で迫っていく。日本では熊と人間とに次々と不幸な接触があったことが話題になった一年だったが、島や熱帯・亜熱帯からやって来た作家たちにとって、日本の熊はくまモンだったり、遠い場所の生きものだったり。想像力を問われる存在だとわかった。中には、カーリーナさんのように、われこそが熊であると、比喩的主題には比喩で返す人も。(吉田恭子／KWR実行委員)

開催日時:10月19日(日)、会場:松栄堂 薫習館 KARANIホール
司会:藤井光(翻訳家、東京大学／KWR実行委員)



Photo by Ryo Yoshimi

クロージング・イベント(朗読会)

あっという間の一ヶ月が終わり、11月16日、クロージング・イベントが開催された。レジデントのみなさんが朗読をしてくれる。滞在中に書かれたものもあれば、そうでないものもある。レジデントはもちろん、聴衆も日本人が半数以上を占めるとはいえ多国籍、多言語である。これまでは朗読される作品を翻訳し、投影したり紙で配付したりしてきたが、今年は投影や配付は一切なし。文字どおりいい意味で「声」が錯綜するイベントとなった。たとえば国内からの参加者、花氷さんの詩は、実行委員の吉田が英訳し、オーストラリアからのレジデント、パトリックが朗読してくれた。韓国からのキムさんの作品を翻訳してくれたのは、一昨年韓国から翻訳者として参加してくれたカン・バンファさんだった。また、今年も「朗読を終えた作家が次の登壇者を紹介する」というしかけも健在である。レジデントのみなさんの、横の、そして縦の緩やかなつながりを感じた。(河田学／KWR実行委員)

開催日時:11月16日(日)、会場:松栄堂 薫習館 KARANIホール
司会:澤西祐典(作家、龍谷大学／KWR実行委員)



Photo by Ai Nakagawa

2025年度公募について

今年は世界49カ国・32言語、計113名の作家からご応募をいただきました。二段階の選考を経て、京都文学レジデンスフェローとして日本語作家1名、日本語以外の言語の作家2名を選出。さらにイタリア文化会館-大阪フェロー1名、国際交流基金ASEAN文芸フェロー3名、Arts Council Koreaフェロー1名を迎え、計8名のラインナップとなりました(内1名は参加見合わせ)。

選考は嬉しい悲鳴とともに、悩みに悩む時間の連続でした。そうして集まった多様な背景を持つ7名の作家たち。「果たしてこの機会を楽しんでもらえるか」と期待と不安を抱えつつ初日を迎えましたが、最終日の朗読会で作家の肉声を通じて作品に触れたとき、すべてが腑に落ちたような感覚になり、「これで良かったのだ」と心から思いました。

次回の公募は2026年春を予定しています。公式ウェブサイトやSNSで随時お知らせしますので、ぜひご注目ください。

(小林久美子／KWR実行委員)

Shut up & Write!® with KWR

「Shut up & Write!®」とは、ひとつの場所で複数人が同時に「書く」ことへ没頭する集中執筆セッションである。書くものは詩歌や小説にかぎらず、翻訳や日記、研究論文、新聞記事、エッセイ、ZINEなどなんでもあり。11月1日および8日に本イベントを開催し、KWR参加作家とともに、さまざまな書き手が京都 蔦屋書店 SHARE LOUNGEに集った。会の初めには肩書きを伏せた自己紹介に併せてその日に書くことを共有する。その後は10分間の休憩を挟みつつ50分間の執筆を2セットおこない、参加者はお互いの作品を読み合うことなく静かに原稿を書きつづける。会の終わりには執筆の進捗を報告するとともにShut up & Write!®で抱いた感覚を語り合った。「執筆から逃げられない面白さ」や「ひとりではないけれどひとりのような感覚」、「共に書くことで不安がなくなり安心感に包まれた」という感想が寄せられ、「1日8セットはどうでしょう」という提案もあげられた。静かな執筆時間を共に過ごすことで、「書く」という行為へ向き合うのは自分ひとりではないとあらためて気づくことになる。Shut up & Write!®で孤独を分かち合った記憶とともに、書き手たちはこれからも日々静かに書きつづけてゆくのだろう。(石田航大/KWRアシスタント)



Shut up & Write!® with KWR

開催日時:11月1日(土)、8日(土)
会場:京都 蔦屋書店 SHARE LOUNGE



丸善 京都本店ブックフェア

「いま読みたい世界文学」

開催期間:9月8日(月)~11月2日(日)
会場:丸善 京都本店

丸善ブックフェア2025

京都文学レジデンシーの恒例ともいえる丸善 京都本店さんでの2ヶ月に渡るブックフェア。今年も「海外文学」をテーマに、招聘作家と実行委員メンバーそれぞれのおすすめ本が棚に並びました。ホメロスの『オデュッセイア』からパーシヴァル・エヴェレットの『ジェイムズ』まで80冊近くが並んだ今回のブックフェアでは、文庫本に限らず単行本も含めて陳列したほか、面陳列と背差しを混ぜることで、家の本棚のように手に取っていただきやすいディスプレイを展開。並べられた本の側にはPOPがわりに選書者の名前のみを明記することで、かえってお客様の気を引くことができたのか、不思議そうに本を手にする姿が度々見られたとのことでした。足を運んで下さったみなさま、そしてご協力いただきました丸善 京都本店さん、誠にありがとうございました。次年度のブックフェアもどうぞお楽しみに。(杉本はな/KWRアシスタント)

旅するように思い出す

第4回京都文学レジデンシーと連携した特設会場が、京都 蔦屋書店(京都高島屋S.C.)内に2つ設けられた。一つは、5F店舗で開かれた「旅するように本を読む」という開催記念フェアである。第4回の招聘作家の出身国や旅のまなざしに通じる物語やエッセイが集められた。内田洋子『モンテレージョ 小さな村の旅する本屋の物語』、斎藤真理子『隣の国の人々と出会う』など、それらを片手に旅に出たくなるような本が並んでいて、思わず長居してあれこれ求めてしまった。もう一つは、6F SHARE LOUNGE内に設けられた、過去の招聘作家たちの著作を集めたライブラリコーナーである。ずらりと並んだ懐かしい名前の本を手に取りながら、作家や当時の学生アシスタントも含めた世界各地から招いた作家たちの顔を、さまざまな土地を旅するように思い出した。(西岡亜紀/KWR実行委員)



京都 蔦屋書店ブックフェア 「旅するように本を読む」

開催期間:10月18日(土)~11月17日(月)
会場:京都 蔦屋書店

KWRライブラリー

開催期間:10月1日(日)~11月30日(日)
会場:京都 蔦屋書店 SHARE LOUNGE

寄付・サポーター制度について

京都文学レジデンスは、各種団体の皆さまからの特別共催・協賛・協力・後援、そして個人サポーターの皆さまからの温かなご寄付に支えられて運営しています。

今年は、吉田美佐子様、中島京子様、西村勉様、神羽登様よりご支援を賜りました。実行委員一同、心より御礼申し上げます。いただいた寄付金は、京都文学レジデンスの各事業の充実に大切に活用させていただきます。

これまで寄付・決済サービス「コングラント」では、都度寄付（1回ごとの寄付）を中心に募集してきましたが、このたび、新たに年単位で継続的にご支援いただけるサポーター制度を導入いたします。

- ・ちょこっとサポーター：年間 3,000 円
- ・しっかりサポーター：年間 5,000 円
- ・がっつりサポーター：年間 10,000 円



寄付はこちらから

京都で文学を育むこの試みが、ゆっくりと、しかし確かな歩みを積み重ねていけるよう、皆さまのお力添えを心よりお待ちしております。「百年続くレジデンス」をともに支えてください。（澤西祐典／KWR 実行委員）

第4回京都文学レジデンス / Kyoto Writers Residency 04

開催期間：2025年10月18日（土）～11月17日（月）

主催：京都文学レジデンス実行委員会

共催：立命館大学国際言語文化研究所、龍谷大学、京都芸術大学

特別共催：国際交流基金

協力：Arts Council Korea、イタリア文化会館-大阪、株式会社共立メンテナンス、京都 蔦屋書店、丸善 京都本店

協賛：DMG森精機株式会社、香老舗 松栄堂

後援：京都市、京都経済同友会、京都市教育委員会

共同プロデュース：MUZ ART PRODUCE、CAVA BOOKS

京都市「Arts Aid KYOTO」補助事業



京都 蔦屋書店



香老舗 松栄堂



Our media



WEB
基本情報は
こちら



note
サンプルワーク
など読み物は
こちら



Instagram
最新情報や
お知らせは
こちら



X (Twitter)
最新情報や
お知らせは
こちら



YouTube
オープニング・
フォーラムの
動画を公開中



京都文学レジデンス ニュースレター 第6号

発行日：2026年1月20日

発行元：京都文学レジデンス実行委員会 kyotowritersresidency@gmail.com

デザイン・編集：大松智也・杉本はなな（KWRアシスタント）、佐藤真理（KWRマネージャー）